コロナ禍における観光の変化

中庭ゼミ２年（青木柊吾・荒井四海・荒金匠・今別府大志・梶本凌平・峯脇由暉・山口誠也・篠原洸）

1.目的

日本では、新型コロナウイルス感染拡大を防ぐために外出自粛を行った。そのため観光客が一時的に減少し、観光関連業界は大きな被害を受けることとなった。

危機的状態にあった観光関連業界は、3 密を防ぎつつ観光ができる取り組みを行い、コロナ禍を乗り越える方法を模索している。

今回の発表では、現在観光関連業界が行っている取り組みの事例をまとめ、今後の方向性や可能性を検討する。

2.調査方法

インターネットに掲載されていた記事や事例を調べた。オンライン観光とワーケーションについては、事例を調べた上に KJ 法を用いてカテゴライズを行った。

マイクロツーリズムにおいては、この用語を主唱している(株)星野リゾートによる「マイクロツーリズムーご近所旅行のススメ」を読み、事例を調べた。マイクロツーリズムは業界の中でも始まったばかりの取り組みであり、定義や条件が曖昧な中、私たちでマイクロツーリズムの存在意義、これからの目指す方向を考察した。

3.オンライン観光

我々も緊急事態宣言が発令されていた春学期は学校には足を運ばず、Zoom によるンラインでの授業が行われた。

観光業でも新しい取り組みとして、オンラインによる観光が行われた。オンラインによる観光は人数制限がなく、移動制限もないことから多くの人に活用されると思われたが、リアルの旅行には劣り、衰退した。しかし、オンラインは観光単体だけではなく教育や、広告として用いることで生き残ると予想される。

4.ワーケーション

オンラインを活用した働き方が増えている。

オフィスワークではなく、オンラインを活用した働き方が普及してきている中、休暇を取り入れながらオンライン上で働くワーケーションと呼ばれる新しい観光スタイルが注目されている。ワーケーションは 1 日の仕事を旅先で行い、好きな時間に旅行や観光などを行うことでより快適に働くことを目的とした観光の一種である。

このようなワーケーションも、利用者により複数の活用法があるのではないかと考えた。1 つが旅行を楽しみながら仕事をする旅行目的型の休暇活用型、２つ目が働きながら旅行や観光を楽しむ仕事目的型休暇非活用型があり、その中に宿泊施設で集中的に仕事をする仕事目的型の集中型に分けられるのではないかと考えられる。

5.マイクロツーリズムという仮説

マイクロツーリズムという取り組みは観光に携わる業界の中で始まったばかりで、定義や条件、位置づけが曖昧である。本稿では星野リゾートによる「マイクロツーリズム」のススメを参考にし、場所のみ自宅から１～２時間と定義する。

マイクロツーリズムには宿泊型マイクロツーリズムと日帰り型マイクロツーリズムの二つが存在すると言えるのではないか。宿泊型は観光地に滞在し、周辺の観光地や宿泊地に利益を生むマイクロツーリズム。一方、日帰り型は駅周辺に道の駅や温泉施設などの観光施設が密集している地域が宿泊してもらわずとも利益を生むことのできるマイクロツーリズムを指す。

今後、マイクロツーリズムは宿泊型と日帰り型の二極に分かれ、高い付加価値を得ることができない地域のマイクロツーリズムは衰退していくのではないかと考える。

6. まとめ

事例を見ると、コロナに限らず、市場の縮小や高齢化など、後に重大化していくと見られている経営課題に対して事前に取り組み、商品開発を行っていた企業や事業が生き残り、進化していくことが予想される。また、新型コロナウイルスの影響を受けて対応が遅れた企業や事業、その場しのぎとなる事業は消え、観光では密にならないことを含め、緩いネットワークで結びついた人々による観光が生き残っていくのではないだろうか。